

善導大師の法界身釈について

稲岡了順

『観無量寿経』第八像想観に、「諸仏如来は法界身入一切衆生心想中」（浄全一、七）とある。この法界身は、諸経の中に、ほとんどその例を見ず、『観経』に於いても、いわば、突如としてあらわれたものである。善導は、この法界身を釈して、「言「法界」者は所化之境即衆生界也言「身」者是能化之身即諸仏身也」（浄全一、四七）とし、法界身は、所化の境たる法界に、心偏故、身偏故、無障礙故の三由によつて、衆生の念に応じて、その心想の中に影現するものであるとし、仏と衆生とを二元的に示している。これは、善導の確信である「諸仏大悲於「苦者」心偏愍念常没衆生」という衆生救済の具象化である。即ち、心偏とは大慈悲であり身偏とは影現、無障礙は大智慧を示すものである。

一方、淨影等の諸師は、法界とは真如法性の異名であるとし、諸法は勿論、一切万法すべて法界の体性を具するものとし、諸仏と真如と衆生の心想とは、一体の上の諸相であり、一元的なものであるという。衆生は、みずからの心性をきよめることによつて、法身の理仏を具し、そのまゝ仏となる。故に、『観経』所説の法界身の観法は、法身同体の真如観であるという。善導は、これを排して「既言「想像」像仮立三十二相者真如法界身豈有相而可縁有身而可取也然法身無色絶「眼対」更無「類可」方」（浄全二、四七）とのべてい

る。

ところで、諸宗に於ける法界観は、きわめて多様である。法藏は、『華嚴五教章』に、「法界縁起無礙自在一切一切一切一主伴円融」（大正四五、四八五）、天台は『止観』三に『出「法界外」何処更別有「法」（大正四六、二三）』という。高崎直道氏は、『如来藏思想の形成』（七六〇）で、『華嚴経』の諸品に説く法界とは、一方においては諸法の本性であり、真如法性へと展開するが、他方では、法の領域、即ち、仏の教えの領域であり、それによつて実現される世界ともなるとのべている。故に、法界身というものは、淨影等の如く、法性身、法身とも解され得るし、善導の如く、衆生界との係り合いの中に、その意義を見出すこともできる。

しかし、淨影等の諸師が、法界身を無色無形の法性身と解したことにについては、今一つ釈然としないものが残る。例えば、淨影は、『大乘義章』第十九に、仏身開合の論理によつて、三身、四身を説くが、要するに、淨影の仏身観は、真身、応身の二身に究極する。現に『観経義疏』に於いて、淨影は「観「仏有」二、一真身観二応身観」（浄全五、一七二）とし、「観「仏平等法門之身」是真身観、観「仏如来共世間身」名「応身観」（浄全五、一七二）といひ、『観経』所説の三十二相八十種好を具せる阿弥陀仏を觀する觀法は「應身観」としている。これは、『観経』に示される極楽の依報を論じて「弥陀淨国淨土中「佛」といひ、次いで「更有「妙刹」此經不説「華嚴具弁」（浄全五、一五一）とのべ、『華嚴経』所説の淨土と『観経』の淨土を區別していることによつても知られるし、就中、『義疏』に「今此所論是「應身」中「佛淨信観」（浄全五、一七一）とか「此中所「佛觀」是「應身也」（浄全五、一八五）によつて明瞭である。

吉藏は『觀經義疏』で、想法身、想應身、二種の觀法を示し、法界身は、第一の想法身に於たるという。吉藏は、この外に、実相法身觀、修成法身觀、化身觀の三種觀法を説くが、実相、修成の二法身觀は、先の想法身觀にあたり、化身觀は想應身觀にあたる。この中、化身觀については、「觀_レ化者觀_二西方淨土_一也」とのべている。即ち、淨影、吉藏等が『觀經』の説相について、一方では法界身を法性となし、他方、阿弥陀仏を応身、化身とすることに自家撞著があるのである。

注意すべきことは、『觀經』が法界身を説く文は、「諸仏如来は法界身」とあることである。吉藏は、この点を意識したのか、法界身をたゞちに阿弥陀仏に結びつけて説くことはしていないが、淨影は、觀仏について、前述の如く、真應二觀を示し、応身觀を更に通別に分け、彌勒や阿闍世等の特定の一仏を觀するものを別觀とし、『觀經』に於ける觀法は、阿弥陀仏を觀する別觀であるとし「仏法身入_二於一切衆生心_一故_三當_二一心繫念觀_レ彼阿弥陀仏_一」(淨全五、一八七)とのべて、明らかに、法界身を阿弥陀仏にことよせて説いている。この点については、淨影は、後の觀益を明かす段に於いて「得_レ見_二阿弥陀仏_一即得_レ見_二於一切仏身_一」といい、更に、「得_レ見_二阿弥陀仏身_一即見_二仏心_一」とのべ「諸仏_二同故_一得_レ見_二即見_二一切_一」(淨全五、一八七)と会釈しているが、一方に於いて『觀經』所説の阿弥陀仏を応身としながら、同じ『觀經』所説の法界身を法性身とし、阿弥陀仏に同ずるとする淨影の説は、肯首しがたいものがある。「諸仏如来は是れ法界身なり」という大前提があるのに、その諸仏の随一である阿弥陀仏を応身とするのは、明らかに矛盾である。

一方、善導は、「諸仏如来は法界身なり」という説示をふまえて、

善導大師の法界身釈について(稲岡)

諸仏は三身同証なりとし、各々、有縁の行者のための待対の法となることを明かし、術通なき凡夫のためには、作意にも不作意にも、常に、その心念に応じて、みずから現じたもうものであるとし、法界身を徹頭徹尾有相的にとらえて我々に示したのである。そのことは、「此觀門等唯指_二方立_一相住_二心而取_一境如来懸知未代罪濁凡夫立_レ相住_二心尚不_レ能_レ得_一」(淨全一、四七七)の文の中に凝結しているのである。

なお、良忠は、『伝通記』で、この法界身を報身に配当している。法界身というものは、利他の活動体を示すものとして受けとめるべきであるから、これを報身とするのは、一応、もつともである。事実、善導が、『玄義分』に於いて、仏身を、法身、報身、応身の三身に開き、阿弥陀仏が報身であることを、經説を引用して証明したことは、いまさら、いうまでもないことである。しかし、この善導の仏身説は、当時の通例にしたがつたまでのことであり、就中、通論家の別時意説や、淨影等の阿弥陀仏応身説に対応するためのものであった。私は、阿弥陀仏を含めた諸仏如来に対する善導の面目は、むしろ、この法界身釈の中に、すべて帰納されていると考えるのである。故に、あえて、法界身_二阿弥陀仏_一報身とするのは、法界身というものの、躍動的活動的な意義をそこなうものがあるのではないかと危惧するものである。